本と地域の情報誌
県北どらくろあ
第127号　2026年10月1日（毎月1日発行）

中国5県絶景の旅⑪

「広島県三原市・磨崖和霊石地蔵」
――瀬戸内の岬で最古参の地蔵様

久しぶりの「絶景の旅」。「新・芸備線ストロール」の取材に行くかどうか迷ったが、少し前にやった草刈りで腰に負担をかけてしまったようで調子が悪い。長時間歩く自信がないので、車で行動できる絶景の旅を選んだ。

9月15日火曜日、午前8時半過ぎに、三原市内の宿泊先を車で出発した。9時前には、三原市の南岸にある須波港に到着。視界に島影がはっきり見えるので、海というよりも大きな湖のようなイメージ、波も穏やかだ。

フェリーの乗船券を買わなければと、それらしき建物に入ったのだが、切符売場が見当たらない。売店の人に尋ねて、建物の裏手に窓口があるのを教えてもらった。建物の中に切符売場がないのが不思議な気がしたが、実際に切符を買ってみてその理由がわかった。

その建物の裏手に、フェリーに乗り込む車の駐車場が広がっている。車長で料金が違うので、実際の車を視認できる場所に窓口を作ったのだろう。わたしは車が見えない場所に停車したので、車検証の提示を求められたが、「取って来ます」と言うと、「まあ、大丈夫でしょう」と口頭の申告で許してもらった。

軽ワゴン車は佐木（さぎ）島の向田（むこうた）港まで片道で1680円。理由はわからないが、往復切符は販売していない。窓口の外にある自動販売機で購入する。

すでに乗車を待つ車の列ができていて、わたしは2列目の最後尾に車を停めた。乗船待ちの駐車場には「大久野島」の看板が見える。戦前には大日本帝国陸軍の毒ガス製造工場があった島として有名だったが、今はウサギの島として海外にも大人気だ。看板に、ウサギのイラストが描いてある。

しばらく待つとフェリーが到着、乗客や車両が降りると、すぐに乗船を開始。一階部分が車両スペースになっていて、係員が切符を回収して、右、真ん中、左と3列駐車の列を指示。もう一人の係員が待ち構えていて、無駄がないように停車位置を誘導する。ゴミ回収車や郵便局の赤い軽ワゴン車も乗船していて混雑している。橋がないので、フェリーの定期便がライフラインの一部を支えているのだろう。

ギャンギャンというスクリュー音を響かせて、船が動き出した。フェリーを利用したことは何度かあるが、車と一緒に乗ったのは初めて。四方を車に囲まれているので、海上の景色を見ることはできない。15分余りで佐木島向田港に到着。しばらくすると車が動き始めて、わたしも後に続いた。

フェリー乗り場の駐車場に車を停めて、トイレを利用して出て来



広島県重要文化財「磨崖和霊石地蔵」



「さぎしま八十八ヵ所巡礼」の札所

たら誰もいなくなっていた。案内板を確認すると、目的地はすぐそばにある。車で来る必要はなかった？　港から県道佐木島線に出て、石灯籠のある波打ち際に降りてゆくと、巨大な岩に石仏が刻まれているのが見える。「磨崖和霊石地蔵」だ。

中国新聞社刊行の「広島県文化百選⑨史蹟編」に掲載されている写真を見て、実物を見てみたいと願った。本の紹介文によると、「高さ約二・七㍍、幅約四・七㍍、厚さ約四㍍の巨岩に半肉彫りされた地蔵菩薩坐像」。造立は正安2年（1300年）、仏師は念心である。近世に伊予宇和島（愛媛県）の和霊神社の信仰の影響を受けて、和霊石（割石）地蔵と呼ぶようになったとされる。

瀬戸内海の岬の地蔵の中ではもっとも古く、芸備地方の在銘石造物の中でも古い部類に属する。彫法は密で姿は秀麗、昭和50年に県の重要文化財に指定されている。

本の写真は干潮時に撮影されたもので、わたしの訪問時は石灯籠の台座の部分が海水に浸かっていて、石像の前に回り込むことができなかった。仕方なく、港の桟橋に戻って撮影した。石像の首の辺りまで濡れた痕が残っているので、満潮時には海面からお地蔵様の頭だけ出ているのだろうか。

早々に目的を果たしてしまった。海沿いの県道佐木線をドライブすることにした。沿道に石仏が安置されていて、札所の番号と仏様の名前を刻んだ石柱が立てられている。三原市ホームページからプリントアウトした「さぎしま八十八ヵ所巡礼マップ」によると「島にはお大師さんと呼ばれる四国巡礼のミニコースがあります。大正のはじめに設けられたもので、1番から88番まで、すべてまわると5～6時間かかります」。巡路は約15キロだ。

再訪して、潮風に吹かれながら、のんびりと巡礼の道を歩いてみたいと思った。島の最高峰である大平山（たいへいざん）にも登ってみたい。標高275・5メートルで、車で行くことはできない。360度の大パノラマと、巡礼マップには書かれている。磨崖和霊石地蔵とは別の“絶景”が見られるかもしれない。腰の具合が良くなれば……（苦笑）

島の南に位置する向田港とは逆の北にあるさぎ港に入ったときに、気になる看板を見た。「映画裸の島ロケ班宿泊地」（1959年～1960年）。「裸の島」は広島出身の新藤兼人監督・脚本で、孤島で自給自足の生活を行う4人の家族の葛藤を、圧倒的な映像美で描いた。モスクワ国際映画祭グランプリを始め、数々の国際映画祭で受賞、世界60カ国以上で上映された。

看板には「新藤監督の直筆の記念碑が庭にあります」と書かれている。母屋の方に声をかけたが返事はなく、人が暮らしている気配はない。勝手に庭に入らせていただいて、記念碑を撮影させてもらった。さぎ港から、緑のお椀を伏せたような円墳形の宿弥（すくね）島が見える。映画のロケ地で、周囲約600メートルの無人の小島である。

向田港に戻って、磨崖和霊地蔵を再度撮影、腰の辺りまで潮が満ちている。ちなみに気象庁のデータでは、三原市糸崎の15日の干潮時刻は、1回目が6時44分で2回目が19時、満潮時刻は1回目が0時24分で2回目が13時6分。もう少し帰りの時間を遅らせれば満潮時のお地蔵様の姿を撮影できたのだが、これは後日調べてわかったことで、後の祭りである。

11時24分発のフェリーで須波港に帰った。今回は乗船順が2番目、最前列に駐車して、海を渡るフェリーの前景を楽しむことができた。



映画「裸の島」の新藤監督直筆の記念碑



向田港に着岸した弓場汽船のフェリー



寄稿エッセイ
「一本片爪」
高柴順紀（菊栽培農家）

小学校で両手の指をのばしたり、折ったりして算数の世界に入りましたが、後に十進法だと教えられた。今は二進法で1と0だけで処理するコンピュータの時代になっている。計算どころかいずれ人間が支配されてしまうだろうと言われるＡＩ（人工知能）にまで進展している。電気箱のなかで1と0が無限にうごめいているのだろうか。

素人には訳の分からぬ数理とちがって、かって牛の世界では足の爪数で計算した場面もありました。今は「牛飼い習俗」という言葉自体が死語になっていますが、表題の「一本片爪」は何故か忘れられない言葉です。菊栽培を始めるまでは、我が家は図のように牛と同居していたので当然かもしれません。

何故非衛生な家造りだったのかは分かりませんが、家族同様に扱っていたのは水田耕作には無くてはならない大切な労働力だったからでしょう。加えて化学肥料のない時代ですから、山の夏草などを踏ませて家の中で堆肥つくりもさせていました。ある程度溜まると竹二本の間にもっこを付けて父と母が二人して外に出していました。この時ばかりは悪臭が家中に広がり、これだけは子供のころの我慢できない牛の記憶となっています。

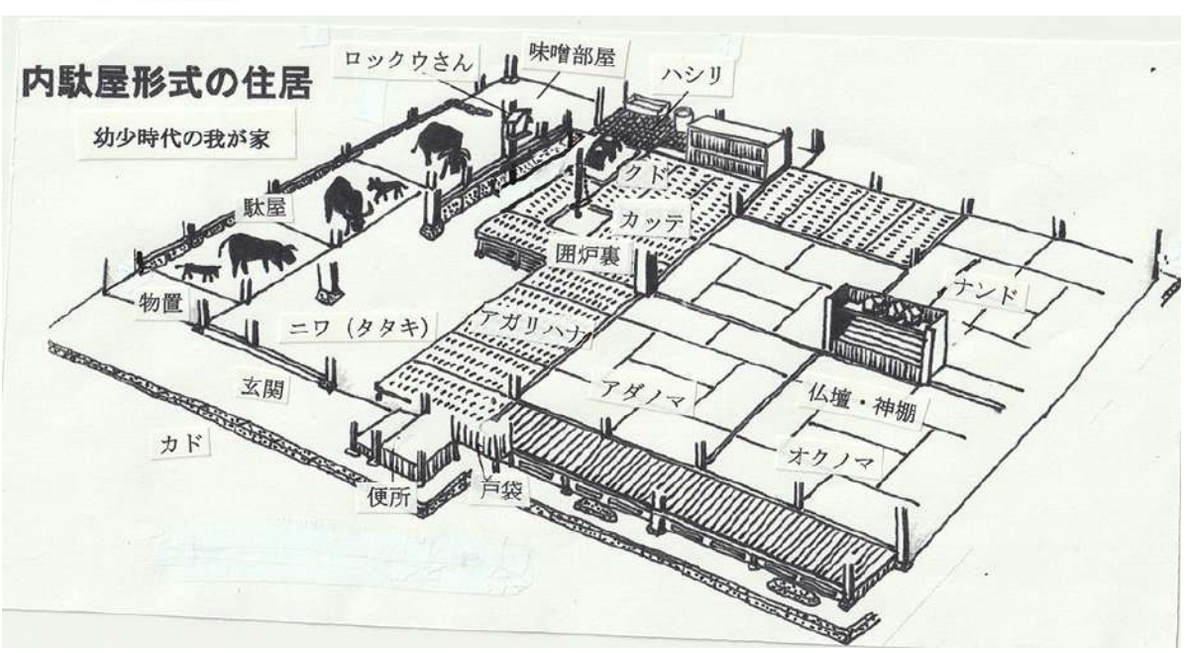
牛を持たない米農家は仕方なく牛小作となって牛を借りました。この借りる条件を牛の爪数で決めていたのです。牛は四本足ですからひずめの数は八本。「一本片爪」では借りた牛の子が売れた時は八分の三が牛小作の収入になりますが、借りた牛の初産からその子牛が売れるまでの二年間は無収入でした。貸した人は八分の五が入るわけですから当然牛分限者となる仕組みでした。どんな制度でも泣く人もいれば笑う人もいるということです。

でも家族の一員だった牛が事故などで死んだときは、亡くなった年月日や飼い主の名前を入れた小さな石像を造り、粗末でも馬頭さんとして道路端に祀ってきました。決して馬頭観音は牛や馬の観音様ではなかったのですが、誰が思いついたのか観音さんに馬の頭が付いていたからでしょうか。比婆の山里ではどこでも見られる馬頭さんです。

花田植の時には牛への感謝と供養のために牛を綺麗に飾り、田植え前のしろかきをさせます。牛にとってはハレの舞台で、東城や比和では大山供養田植として今も続けられています。ただ残念なのは牛自体が少なくなり、この行事自体の継続も危ぶまれる時代になっています。

蛇足ですが学生時代、安い下宿先だったので行って見ると、牛小屋の二階でした。一年間、夏の蚊には往生した思い出もあります。





《参考文献》
「奥備後牛飼いの民俗」（広瀬繁登著、『広島民俗』第24号）

ハロー注意報㉞
――進駐軍がいた町のはなし
結婚式のドタバタ劇

松岡 初枝



戦中、出征が決まった将校の結婚式

「♪逃げた女房にゃ未練は無いが…」、披露宴も酣（たけなわ）、新郎新婦が色直しで席を空けた時、新郎の伯父が気持ちよさそうに十八番（おはこ）の浪曲子守歌を唸いだした。着付室にもスピーカーがあるので、その大声は流れて来た。「何やってんだよ伯父さんは！」結婚披露宴にはおよそ似つかわしくない曲だが、当時大流行中の歌だったから伯父さんもつい歌ってしまったというところだろう。何と最後まで唄った後、酒も手伝ってニヤッと笑った時、名司会者が「こうなるなよ、という含蓄に富んだ伯父様の唄声でした！」。凍りついた宴席もこの一言でドッと笑いに変わったのだ。

それにしても伯父さんがなぜ浪曲子守歌を唄ってしまったのか…。酒の勢いか、流行歌の勢いか、今となってはわからないが、昭和の時代、ベビーブーマーの結婚披露宴は派手なことこの上なしだった。一般人が芸能人の披露宴を倣ったのだろうが、かなりのお金を使ったのは間異いない。

「御夫婦での最初の共同作業、ウエディングケーキ入刀でございます。皆様盛大な拍手をお願いしまーす！」。大きなケーキが入場する。そのケーキは石膏細工で、五段のデコレーションケーキ風の代物だ。新郎新婦が紅白のリボンのついた長いナイフを入れる部分だけが三角の穴が空いている。その穴へ本物の小さいケーキが差し込まれていて、ナイフを入れると白い生クリームが付くという訳だ。パチパチとシャッター音、「いいぞー」、新郎新婦の友人達が写真撮影するのもこの場面が一番のポイントで、若いカップルの満面の笑みは、人生最良の瞬間である。ハリボテのケーキも、写真になるとそれなりの輝きを放っていた。どんな場面にもそれぞれの裏があるという訳だ。

「てめー！　ただじゃおかねーぞー！」酔った両家の父親どうしが大喧嘩を始めたから、両家の母親達は「おとーさん、何やってんのよ、止めてー」、なかば泣き顔で二人を引き離そうとするが、二人の酔っぱらいは胸ぐらを掴んで離れない。「まあまあお父様達、お止めなさいなー、こんな良き日に」、こんな時の祖母の迫力は堂に入ったもので、二人は渋々手を離した。フロント係も飛んで来て「とりあえず清算は後日ということで、今日のところはお帰りくださいませ」。当時はクレジットカードで払う時代ではないので、披露宴の客が帰った後に、両親と会計担当の友人二、三人が残って、当日に会計するのが常だった。新カップルの二人はとっくに新婚旅行へ行ってしまった後のことだ。このカップルは地元の新郎、他県の新婦。どうやら新婦の地方の習わしで、男側が七割、女側が三割の払いだ、と言って譲らない。新郎の父は頭割りが当然だと言って聞く耳持たずで、というところだ。こんな大切な事を前もって決めて置かないからこうなったと思うが、何となく決めないまま、当日を迎えてしまったらしいのだ。各地方や土地の慣習は様々で、多くが自分のほうが正しいと思っているから、収拾がつかなくなる。この日の二人の父もこの典型で、「これから長くつき合うんですから、頭を冷やして明日払いということでネ」。又々祖母が笑って言うと、何とか収まったが、遠方からもう一度式場に来ることになった新婦の父は「覚えてろ！」と物騒な

ひと言を残して、親族達が乗って待つ観光バスに乗った。両家の母親二人は「すみません、また明日ということで、大先生ありがとうございました」。何とか帰途についた両家だったが、この後末永いつき合いが続いたかは知らない。この手の話はたまにあるらしかったが、お金を廻るしこりは、後々別れにつながってしまうこともあったのだ。

大安吉日、秋晴れの良き日、その日の二組目の結婚式でのことだった。遠方から嫁ぐ新婦は早々と白無垢の衣裳に身をつつみ、母親も黒留袖、父親はモーニングに着がえを済ませて、新郎が着付けに来るのを待っていた。結婚式に出席する親族も集合していたので、「何をしているんでしょうねえ…。ムコさんも親もまだなんてねえ」。式の始まる時刻の十分前、新郎の両親が普段着のまま髪振り乱してやって来た。「申し訳ありません。息子がゆうべ出掛けたまま帰って来ないんです！」「ええ！　どういうことで…」「置手紙があって『すみません、〇〇さんとは結婚できないんです。父さん母さんゴメン、しばらく帰りません』、これです」。その場は大さわぎ、「どうなってるんですか！娘は三日も前からホテルに泊まって用意しているんですよ。もう式だって始まるし、親族だって始発で出て来たというのに…」「何しろ当人が居ないんです。今日の式は無し、すべての支払いは全てこちらで出します。皆様の旅費も払いますからお許しください」。新婦は泣き出し、親兄弟はカンカン。新郎の両親は土下座して泣いている。披露宴会場を片づけ始める式場のスタッフ、新婦の衣裳を脱がせ、化粧を落とし、もうメチャメチャなことになってしまった。後日談、新婦は東京で一人ぐらしを始め、やがて別の人と結婚したと伝え聞いた。新郎は一年後に赤んぼうを連れて別の女性と実家にノコノコ帰って来たらしい。要するに、前から付き合っていた女性と駆落ちしたのだ。大きな材木商の父が、取り引き先の山持ちの娘との縁組を望み、見合いで決まった結婚だった。材木商の息子の優柔不断と、親の圧力の成せる結末だった。息子の親は慰謝料も払い、修羅場はなんとか収まったが、この出来事は生涯忘れられない。

国際結婚も悲喜こもごもだった。横田基地のアメリカ兵と日本人女性の神前結婚は、もう楽しさ一杯だった。どうしても和服を着たいし、神前での式を望んだ一八〇センチ以上の長身のハンサムの彼、彼女は一五〇センチ程の美人。二人の身長差は三〇センチ。小さな彼女、大きな彼。アメリカから親兄弟も来て、日本語と英語の飛び交う披露宴の最後は“上を向いて歩こう”を皆で唄った。

もうひと組、韓国人女性と日本人男性の場合は全く逆で、韓国のチマチョゴリ姿の新婦を見た日本人側の親類が、二、三人帰ってしまった。「聞いてねえから…。親類づき合いはゴメンだよ！」。これはもう当時の空気感そのもので、最後まで親しく交流することが無いまま、白けた披露宴だった。

今思い出してみると、これらのエピソードはほんの一部で、式の数日前に交通事故で死んでしまった新郎がいたり、実家が火事になり新婦の両親が欠席したり、人生第二のスタートは悲喜こもごもだった。若い二人の門出の日は、ヘタなドラマよりもドラマチックだった。



戦前、自髪の高島田での花嫁と祖母



昭和 50 年代の花嫁と母

プラスマイナス

――現代御伽草子⑰

あきふゆひこ
亜木冬彦

※県北の歴史や風物を題材としたフィクションです。

しおんさんと一緒に、風呂に入っていた。二人並んでステンレスの浴槽に浸かっている。無色透明なお湯は、少しぬめり気があってかすかに硫黄のにおいがした。

「いいお湯ですね」

しおんさんがしみじみとした声で言った。塩野という名前だが、ホアホアがうまく発音できずに「しおんせんせ」と呼んでいたので、それが定着してしまった。

「熱い温泉じゃないのが残念ですがね」

温度が二十度しかない鉱泉で、竈で薪を燃やして温める必要がある。

「この辺りの山は、古い地層で出来てますからね。でも、火山地帯じゃないので、地震も少ないはずですよ」

なるほどと頷いた。物事にはプラスとマイナスがある。

「しおんさんは、いつから麻雀をやってるんですか？」

「この村に来て、初めて卓を囲みました」

心底驚いた。確かに、最初のうちは牌を操作する手がぎこちなかった。ブランクがあるからだろうと思っていた。何より、結果が物語っている。プラスマイナスがほぼゼロ。アキラさんやチャドさん相手に、これは凄いことだ。ちなみに俺は、七百三十一万四千八百鉄の借り。無謀に差し馬（タイマン勝負）を挑んで何度も大敗した。ちなみに鉄は赤水村では円と同等だが、村を出たら通用しない。

「ちゃんとルールを知ってたじゃないですか？」

「漫画で覚えました。ぼくの麻雀の先生はアカギです」

「『哲也―雀聖と呼ばれた男』や『凍牌』もよかったですね。ぼくにとっては、麻雀漫画は参考書のようなもんですよ」

いい加減な嘘を言うような人ではないことはわかっている。この爺さんは、アカギと同じギャンブルの天才？　そういえば、雀魔王と呼ばれたムツゴロウこと畑正憲に、風貌がどこか似ている。

なるほどと頷いた……、いやいや理解できない。福本伸行の「アカギ～闇に舞い降りた天才～」は、実写版の映画で見た。警察に追われて雀荘に逃げ込んで来た赤木しげるが、負けが込んで追い詰められていた南郷の代わりにメンバーに入り、雀ゴロたちを叩き潰すというストーリーだ。赤木はまだ中学生、しかも麻雀のルールも知らない素人だ。

「あんたは、俺の待ちがわかってたよね。いくら捨て牌に迷彩をほどこしても、きっちり当たり牌だけ避けて、くさいところはバンバン切ってくる。俺の顔に何か書いてあるのかな？」

顔に書いてある――、アキラさんからいつも言われていることだ。しおんさんが俺の顔をまじまじと見た。そして大笑いした。

「顔ではなく、パイに書いてあるんですよ」

「パイ？」

自分の肉付きのいい胸を見た。

「ヒャハハハハ……」

しおんさんの笑いが止まらない。

「シューさんはおもしろい人だ。こんな正直な人に逢ったことがない」（褒めてるのか？）

「麻雀の牌です。アキラさんの所の麻雀牌は、けっこう年季が入っている。ぼくは記憶力には自信がありましてね。半荘（はんちゃん）ぐらいで、牌の特徴を覚えてしまう」

「ああ、ガン牌！」

「それです。『哲也』の中で、伏せた牌が何か見分ける雀士が登場する。その男は集中力を高めるために覚醒剤を必要とするジャンキーなのですが、ぼくの場合はナチュラルです」

誇るだけの価値はある。でも、何故プラマイゼロ？

「もっと勝てたんじゃないですか」

しおんさんが小さく頷いた。

「アキラさんもチャドさんも、わたしがガン牌しているのにすぐに気づいたようです。リー牌（牌の整理）しないでぼくを混乱させたり、手で数牌隠して待ちがわからないようにしたり、ときには隠した牌を利用して引っかけたり……」

そんな駆け引きがされていたことさえ、俺は気づかなかった……。

「よし！」

しおんさんが立ち上がった。炭焼き小屋を改装した湯屋から暖簾をくぐって外に出て、川辺にこしらえた露天の岩風呂に身体を沈める。「あーーー……」と声を上げて空を見上げる。俺も後に続いた。火照った身体に、冷泉が滲み込んでくる。

秋晴れだった。伊呂波楓（いろはかえで）の赤く紅葉した枝が、やさしい影を落としている。

「どうして医者を止めたんですか？」



以前から気になっていたことを質問した。年齢のことはあるが、体調には問題はないようだった。

「患者を死なせてしまったんですよ……」

思わずしおんさんの顔を見た。

「四十半ばを過ぎた患者さんで、かなりの高齢出産なので、出生前検査を薦めた。それで、胎児に重度の心臓疾患が見つかったんです。それでも彼女は産みたいと言った。長い間不妊治療を続けて、ようやく妊娠できたんです。でも、夫や家族が反対しましてね。ぼくも、今回は諦めた方がいいと進言した……」

深く嘆息した。

「納得してくれたと思っていました。中絶の手術後にぼくが処方した睡眠導入剤を大量摂取して、海に入ったんです……」

「あんたのせいじゃないですよ」

心からの言葉だった。

「医師としては間違っていないと思います。こう見えても、産科医としてのぼくは優秀なんですよ。でも、世間知らずで病院や専門分野のことしか知らない朴念仁です。結婚したこともないから、家族の心情も本当のところはわからない。もっと彼女の気持ちに寄りよって、妊娠の可能性だってまだまだあると丁寧に説明していたら……」

冷泉をすくってバシャリと顔にかけた。

「ぼくは、自分の母親を殺しているんですよ」

またまた重大発言だ。

「出産時に脳出血を起こして死亡した。不整脈の既歴があったので、出産前にちゃんと検査して、危険があるなら帝王切開という方法もある。ぼくならそんな失敗はしないと思っていたのに……」

「考えすぎなんだよな」

言葉がもれてしまった。

「どうして自分を責めるかな。俺たち野良犬のような人間は、生きることで精いっぱいで、あれこれ悩んでいる暇はないもんな。あんたが救った母親や子供もたくさんいるんだろ？　トータルでは大勝ちしてるじゃねえか」

しおんさんが破願して、大きく頷いた。

「あなたはすばらしい人だ。ぼくの親友第一号です」

こそばゆいが、村人見習い一号よりはマシだと、俺も笑った。

まちの古本屋さん
どら書房
古書探索の旅に、お気軽にお立ち寄りください。

・無料本、百円本、50 円本などのコーナー。
・地元のポストカード、新鮮野菜の店頭無人販売もやっています。
※九日市の開催日は定休日でも開店します。

●庄原市中本町 2-1-10　●定休日：毎週日・月・火曜日（2月は在庫整理で休業）
●TEL: 090(9913)3052　●営業時間 9:30～18:30（昼食休憩 12:00～12:30）
※広島銀行庄原支店の手前（三次側から）※交差点角のまちなか駐車場が使用できます。

特別連載 61

「旧暦」のカレンダーを見る

古川 行洋

第六部　旬と花を見る

今年の九月一日から三十日は、旧暦では七月廿日から八月廿日です。

七月と八月の旬

マツタケ（松茸）

『万葉集』に詠まれるなど古くから親しまれ、日本のキノコの代表です。



松茸は赤松に寄生するため、毎年決まった場所に生えます。国産の松茸は年々収穫量が少なくなっており、それにつれて値段が高騰して庶民にはなかなか手が届かず、「山のダイヤ」とも称されています。

松茸の香り成分は、食欲促進や消化酵素の分泌促進などに効果があると考えられています。

いちじく（無花果）

江戸時代に入ってきて、初めは薬草だったそうです。旬は八月の終わりから十月にかけてです。花は白く実の中に咲かせ、外からは見えず、花の無い果実という名前が付けられました。

さんま（秋刀魚）

秋の魚の代名詞といえば、「秋の魚」と書く秋刀魚です。「秋刀魚」と漢字で書くのは、銀色の細長い体が刀のような形をしているためです。この漢字が当てられるようになったのは、割と最近の大正時代からです。それまでは「青串魚」などと書き、夏目漱石は著書の中で「三馬」と記しています。

さんまは、日本沿岸の沖合で群れをなして回遊する魚で、夏から秋にかけて北の海から太平洋に南下してきます。アラスカからメキシコまで広い海域にも分布しています。そこで、他の魚のほとんどは輸入ものと国産のものが混在して市場に出回っていますが、さんまは今となっては大変珍しい百パーセント日本国内で捕られている魚です。

食べ方について、最も代表的なのが身をまるごと焼き上げた塩焼きです。秋刀魚は身だけでなく内臓も苦味があっておいしくいただけます。それは、秋刀魚の内臓は胃がなく腸も短いため、死んでからもあまり傷まないのです。秋刀魚はシソの葉や梅干しと一緒に巻いて焼くと大変おいしい料理になります。冷凍技術が発達したため、脂ののった刺身や和歌山県、三重県でのように、秋刀魚を使った押し寿司が食べれます。

ヒガンバナ（彼岸花）

ヒガンバナ科ヒガンバナ属の多年草です。秋の彼岸のころ、田畑のあぜや土手を真っ赤に染めます。芽が出てから満開になるまで、わずか一週間ほどです。一気に花を咲かせる秘密は、土の中の球根にあり、冬に葉をのばし、太陽の光をしっかり採って栄養を作ります。その栄養を球根に、どんどん蓄えていきます。そして、秋分の日を迎え、涼しくなる時季にいっせいに姿を現わします。

別名を「曼珠沙華」とも言います。この別名は仏典に由来し、「天上の花」としてめでたいものとされていますが、「地獄花」「幽霊花」「死人花」などと、忌み嫌われる花として知られています。この花が彼岸に咲くことや、毒草であることから、誤って食べた人が死ぬ＝彼岸を迎えるという意味もあるそうです。

また、サンスクリット語で「天界に咲く花」を意味し、その姿を見ると慶び事の兆しがあるという言い伝えがあります。

田畑に植えられることが多いのは、鳥やネズミ、モグラなどから作物を守るため、と言われています。

この花は、北海道から沖縄まで、咲く場所は問いませんが、日本に自生していたものではなく、中国から入ってきたものが各地に分布したのではないかと考えられています。

インバウンド・ラプソディー①

コーヒーのカップの大きさ

マック☆ヤマザキ



１９６４年（昭和39年）第18回東京オリンピックが開催された。その目的は、戦後の復興を世界に示し、日本が平和国家として国際社会に復帰したことをアピールすること。そのために、10月1日「夢の超特急」と銘打って新幹線を東京―新大阪間に開業させ、10日からのオリンピック開催につなげたのだ。今でこそ「シンカンセン」は外国人客にも通じるようになったが、当時は「ブレット・トレイン」（弾丸列車）といういかつい英語表現がされていた。

外国人観光客を受け入れる業務を「インバウンド」、日本人の海外出張等の扱いを「アウトバウンド」と言う。新幹線の開業は、インバウンド時代の幕開けでもあった。これは、私がインバウンド業務に携わっていた時のエピソードである。

アメリカ人観光客を迎えての身近な問題は“コーヒー”。日本で一杯1ドルだったが、問題は、彼らにとっては小さ過ぎるデミタスカップ（60～90㎖）。アメリカでは２５０～３５０㎖のマグカップで飲むのが日常で、ママゴトのコーヒーのように見えたらしい。1ドルが３６０円に固定されていた時代で、コーヒー豆の輸入価格が高いので、仕方のない面もある。

他にも、アメリカ人たちが飲むコーヒーは「アメリカン」、日本より濃度の薄いコーヒーだった。さらに、彼らの本国では「おかわり無料」が普通なので、それが有料なのを後で知って、怒りの火に油を注ぐことになってしまった。文化の違いを痛感、食事の前にガイドが、日本のシステムを説明する必要があった。

アメリカからのお客様を羽田空港で出迎えて、ホテルに着くまでの時間、滞在中に必要となる事柄を説明した。日本ではチップは原則として不要であると告げると、半分喜び、半分戸惑っていた。例えば、ホテルの部屋代や食事代には10％のサービス・チャージがちゃっかり加算されていたので不要だが、タクシーや、ホテル以外で食事をしたときなどに、接客や味に満足(感動?)したときは、10％相当分をチップとして本人に手渡すように進言した。

次に、滞在中必要とする日本語を教示した。「サンキュウ＝ありがとう」、「グッドモーニング＝おはよう」。一例として「ありがとう」はアリゲーター（アメリカや中国に生息するワニ）を連想して、アリガトウと。参考までに、「アフリカのワニはクロコダイルです」と言った。そのことが頭に残って「クロコダイル！」と言ってしまった人もいた。奥さんが助け舟で「あなたそれはアリゲーターでしょ」「ああそうそう、アリガトーだった」。

「おはよう」は母国のオハイオ州を連想して「オハヨー」と発音するようにと説明した。早速翌日から実践していたが、朝食の席で大声で「シンシナティー！」、従業員は「？」。彼はオハイオ州にあるわが町の都市を言ったのだが、やり直して、「オハイオ、アーおはようございます」。会話は成立して大成功！

アメリカからのお客様で日本航空で来日する場合、当初プロペラ機、ＤＣ７Ｃであったため、途中ウエーク島又はミッドウエー島に立ち寄り、給油しなければならなかった。アメリカの航空会社はすでにジェット機でパンナムとノースウエスト航空が就航していた。勿論、給油などせず直接飛行だ。

男性のパーサー（事務長、給仕長）から聞いたＤＣ７Ｃの話、ホノルル近くになって、お客様が４発あるプロペラのうち一基が止まっていたのでパーサーに告げたら、彼は笑顔で「長い旅だったので休ませているんですよ」と言い訳した。クワバラ、クワバラ……

どらくろ俳壇＆歌壇

※参加を歓迎します。

牧野富太郎の句碑や花野中　近藤 昌平

納骨堂秋の日差しを斜に受けて　原 博己

蜩（ひぐらし）の骸（むくろ）ころがる昼の路地　片岡 正人

村祭り禰宜（ねぎ）の衣も黄金色　隆愚

花蕎麦や踏切待ちの右左　大槇 三代子

すれちがうコロンの香り今朝の秋　寺内 龍二

秋霖や愛しき名前おらぶ夜　赤川 冬人

孫の来て作る栗飯のほの甘さ　松岡 初枝

夕餉の膳は里の秋かな　隆愚

投稿＆寄稿

候のことば

「鴻雁来」

隆愚

十月八日から十二日頃を、暦の二十四節気七十二候で寒露の初候を「鴻雁来」（こうがんきたる又はがんきたる）の候といいます。雁が北から渡って来る頃です。「清明」の次候に対応する候で、春に北へ帰って行った雁が再びやって来る時期になります。今では、一部の地域に限られてしまいましたが、昔は日本全国に飛来していたといいます。

旧暦八月頃、丁度、雁が渡って来る頃に吹く北風は「雁渡し」（かりわたし）と呼ばれます。この風が吹くと涼しさが増し、秋が深まります。空の青、海の青も色が冴えてくるので「青北風」（あおきた）とも呼ばれます。

初めて渡って来る雁は「初雁」（はつかり）、鳴き声は「雁音」（かりね）、列をなして飛ぶ様子は「雁行」（がんこう）、そして露の事を「雁の涙」といいました。涙だけは、日本の各地に落ちています。

草木より人翻（ひるがえ）る雁渡し　岸田稚魚

「豪雪伝説」

黒長 澳

久しぶりに祇園峠を歩いて下りた
右側の坂道を上がると三日市駅がある
開設当時から無人駅だ
駅まで上がってみた
冷たい風がホームを吹き抜けている
西城へ通勤していた頃と
変わらぬ光景

昭和三十八年の冬は記録的な豪雪だった
汽車は時刻どおりに来ない
木造の小さな待合所に
顔なじみの通勤者が数人いた
誰もがコートの襟を立てて
寒さに震えながら汽車を待った
遠くに汽車が見えると
安堵の空気が流れる
連日の雪
雪が止むことがなかった
屋根の雪は積もりに積もった
高野町では屋根から降ろした雪が重なり
電線をまたいで
二階から出入りしているという
私は初めて屋根に上がって雪を降ろした
汽車が遅れるのはあたりまえ
どのくらい遅れるか分らない
家を出る時間を遅らせることもできない
帰りは西城駅で待った
三十分以上遅れるとの掲示がでると
駅前の食堂に入った
駅舎から汽車が来たよーと声がする
慌ててホームへ走った
その後あの冬ほどの雪の日が続いたことはない
三十八年豪雪は伝説となった



どらくろあ 掲示板

地域のイベント情報やメンバー募集など
情報掲示板です。

ー 硬式テニス参加者募集 ー

MTEC (Miyoshi Tennis Enjoy Club)
場所：三次運動公園の屋内＆屋外コート

・火曜日（9:30 ～ 12:00）
・水曜日（9:30 ～ 12:00）



《情報＆原稿を募集します!!》

●仲間募集　●教室＆講座案内
●イベント情報　●あなたの大切な本の紹介
●ボランティア・ライター(現地記者)募集！

※応募先はどら書房・赤川まで。
掲載は無料です。

どらくろあ ホームページ

バックナンバーも掲載しているので、ダウンロードしてお楽しみいただけます。

どら書房 郷土史資料コーナー（貸し出し無料）

地元の郷土史に関する貴重な資料を収集、販売ではなく貸し出しを行っています。
閲覧は自由ですので、興味のある方はご自分の目でご確認ください。
まだ全体の資料の整理ができていませんので、問合せについては対応できないときもあります。非営利活動ですので、ご容赦ください。

※「県北どらくろあ」のバックナンバーも揃えていますが、ネット上でダウンロードできますので、なるべくご自分でプリント、製本をお願いします。



「ぐんぐん伸びよう会」（教室：川西町 241　連絡先：080-3631-9125 やない）



当教室では、一人ひとりに合った学習（ちょうどの学習）をし、年齢・学年に関係なく、生徒ができるところから始める学習法です。対象は、乳幼児～小学生。
教室とご家庭との二人三脚で子どものもっている可能性を伸ばしていきましょう。無料体験受付中！！
0~3 歳：4,000 円（週 1 回）。4 歳～小 6 生：算数＋国語（4,500 円、週 1 回）。お気軽にご連絡くださいね。

編集後記

◇今年は雨の秋ですね。残暑が短いのは助かりましたが、豪雨被害に遭われた方には、かける言葉もありません。穏やかな秋晴れの日が続くことを祈ります。

◇久しぶりの絶景の旅、次は岡山の犬島に行こうと決めていたのですが、遠出するだけの体力＆気力がなく、三原市の佐木島になりました。山間部で暮らしているので、海辺に憧れがあるようです。

◇今回からマック☆ヤマザキさんの「インバウンド・ラプソディー」がスタート。外国人目線の日本も書かれていて新鮮です。

◇読書の秋、そして食欲の秋！　新米をたくさん食べて体力回復ですね

発行：どら書房
〒727-0012
庄原市中本町 2-1-10
☎090(9913)3052(赤川)
e-mail:touzin@nifty.com

誌面デザイン:ROUTE183
協賛：九日市愛好会

第300回

しょうばら九日市（くんちいち）

毎月九日に開催されている街角市場です。発祥は天正年間（1573～1591）、織田信長が安土城を築いたり、豊臣秀吉が大阪城を築いたころ、物々交換の市（いち）として始まりました。その歴史ある市が2001年に復活、地元の出店はもちろん、近隣他県からの出店＆名産品で賑わっています。



10月9日(金)
9:00～13:00

◆300回特売セール
（300円のお買得品もたくさん）

◆どらわこミニライブ
（オートハープで歌おう！）
10時開始（天野宅）

TOPICS

★市民ギャラリー「アート多愛夢」
10月8日（木）～10日（土）10時～15時
「第22回庄原絵手紙大賞作品展示」

★どら書房、無料休憩室（漫画読み放題）
※本格コーヒー100円

★HONMACHI STAND→コーヒー100円引き

★キッチン北川・店頭販売（9：30開始）
※大好評のおいしいお惣菜がたくさん！

★あなたも自分のお店を出してみませんか？（出店者募集中！）

＊出店申込みは、【毎月２０日締切】　コンパネ１枚スペース１，２００円～
九日市愛好会事務局　FAX（０８２４）７２－８２８５
〒７２７－００１３　庄原市西本町２－１－１０（楽笑座内）

【ホームページ】
http:www.kunchi-ichi.jp